

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

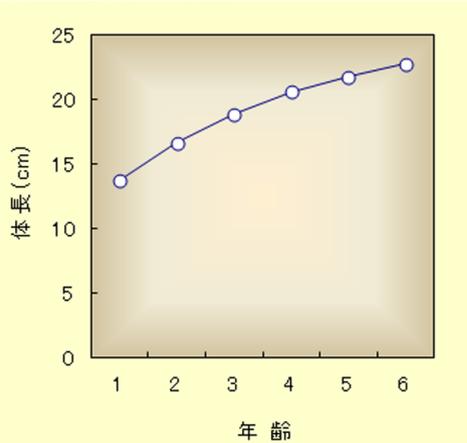
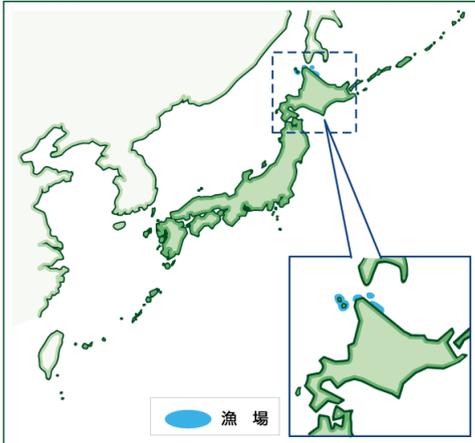
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬~5月上旬)、稚内、枝幸および利尻・礼文周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬~12月)、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40~80mで、底質が砂礫の海域

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類

捕食者: マダラなどの大型魚類、海鳥類、海産ほ乳類

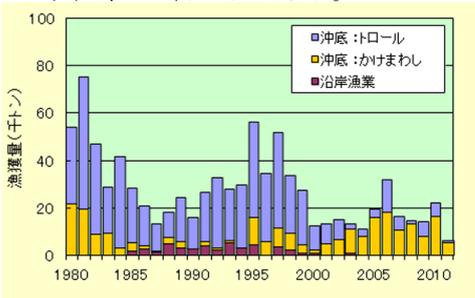


漁業の特徴

宗谷海峡周辺海域に分布するイカナゴ類にはイカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、近年では漁獲物におけるキタイカナゴの混入率は減少傾向にある。漁獲物ではこれら2種が区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(トロールおよびかけまわし、以下沖底)によって漁獲されている。沖底は6~9月に1~6歳魚を漁獲し、沿岸漁業では4~7月を中心に0~3歳魚を漁獲している。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1982年以降減少傾向を示し、1987年には1.2万トンに落ち込んだが、その後増加に転じ、1995年には5.2万トンに達した。1996年以降は減少傾向に転じ、2000年代に入ってから1.0万~2.0万トンの低い水準で推移していた。2011年の漁獲量は前年を大きく下回る6,000トンであった。沿岸漁業も2000年以降150~1,200トンの低い水準で、2011年は50トンであった。

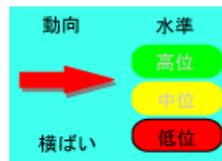


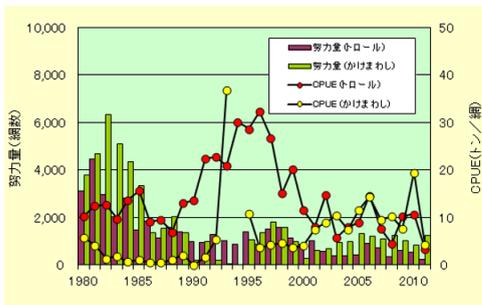
資源評価法

資源回復計画の対象種となっているため、沖底の漁獲量は資源水準を反映していない。そのため、トロールの努力量が比較的安定していた1986年以降のCPUEを用いて近年の資源水準の評価を行い、2003年以降のかけまわしCPUEも判断の参考にした。ただし、資源が日本水域とロシア水域とにまたがって分布していること、漁業実態が変化しているため、CPUEによる長期的な資源水準の比較には不確実性が高い。

資源状態

トロールのCPUEは1990年代に入ると増加傾向を示し、1996年には1980年以降最高の32.3トン/網に達した。1997年以降は減少傾向に転じ、近年5カ年は増減を繰り返しつつも横ばい傾向で、2011年は3.5トン/網と1980年以降最低値となった。1986~2010年のCPUEの平均を50とすると、2011年の水準指数は11であった。以上のことから、資源水準は低位、動向は横ばいとした。また、漁獲物の年齢組成から、2009、2010年級群の加入はさほど多くないと考えられ、2011年級群の加入が不良であった場合は漁獲対象資源全体の豊度が大きく減少する可能性がある。





管理方策

イカナゴ類の資源水準が中～低位に留まっているのは、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられる。2011年漁期においては2009、2010年級群の豊度がさほど高くはないことが推測されており、そのような状況の下、稚内のトロール船が2004年に2隻、2011年に1隻減船になった現在においても、トロールとかけまわしを合わせた沖底の努力量は、2004年以降ほとんど減少していない。現状の漁獲努力量を継続して環境変動により再生産状況の悪化が生じた場合、資源が大きく減少する可能性も残されている。イカナゴの資源回復計画の目標から、若齢魚や産卵親魚保護のための漁獲努力量削減対策をさらに講じる必要がある。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化があり、長期的な資源水準の評価は困難
- 1986年以降のトロールCPUEより、資源水準は低位、動向は横ばい
- 資源動向は、加入年級群の豊度により変動する

管理方策のまとめ

- 北海道では、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした(2011年一部改変)
- 2012年度以降は新たな枠組みである資源管理計画の下、漁獲努力量削減の取り組みが継続して実施されている
- 資源回復計画の目標から、若齢魚や産卵親魚保護のための漁獲努力量削減対策をさらに講じる必要がある

執筆者: 加賀敏樹・山下紀生

資源評価は毎年更新されます。